

相互理解の生態心理学：

アフォーダンスから捉えるコミュニケーション

伊澤宜仁[慶應義塾大学大学院]

1. はじめに

ヒトは、他者の心的表象を直接的に把握することは出来ない。にも拘らず、我々は様々な形で他者との意思疎通を行い、社会生活を営んでいると言えよう。本稿は、その背後に存在するメカニズムの究明を大局的な問題として設定した上で、Gibson(1979)により広く認知されたアフォーダンス(affordance)という生態心理学的な知見が、Grice(1975)以降の推論モデル(inference model)研究に資するものであるという立場を採り、大規模な発話コーパス CHILDES を分析の支柱としつつコミュニケーション、すなわち対話における言語処理の構造について議論するものである。具体的な先行研究としては、生態心理学領域の Gibson(1979)におけるアフォーダンスの議論に加えて、Tomasello(1999)以降におけるヒトの社会的認知(Social Cognition)を議論の基盤に据える。これまでの Grice(1975)による協調の原理(Cooperative Principle)や Sperber と Wilson(1986, 1995²)による関連性理論(Relevance Theory)といった枠組みにより、いわゆるコミュニケーションにおける推論の重要性が強力に打ち出されてきたと言えるが、外界はある意味で無限の情報を内包する海であり、その中から推論に貢献し得る多様な情報をどのように抽出するかについては、未だ確定的な証左は提示されていないと括ることが出来よう。本稿が想定するのは、アフォーダンスにおける系統発生的(phylogenetic)な側面と個体発生的(ontogenetic)な側面のうち、特に後者を習得することこそが、コミュニケーションにおける意図や言語表現を適切に解釈する際に重要性を有するのではないか、という見方である。

2. 生態心理学

従来の心理学は、知覚者による様々な情報の把握・構成等といった立場から、事物の意味や価値というものを主体レベルに閉じ込めがちであったと言える。これに対して生態心理学は、事物の意味とは知覚者により構成されるのではなく、環境の中に客観的に存在するものであるとの想定を行う。この環境の中に存在する価値は、一般にアフォーダンス(affordance)¹と呼ばれる。アフォーダンスは環境に実在する情報群であり、物体・物質・場所・事象・他の動物等、環境の中に存在するものは須らくアフォーダンスを有し、知覚者たる動物はそれらを探索すること、つまりは探索活動を通して自己の行動を調整していくとされる。具体的な例としては、大地はヒトに「歩行する」という行為をアフォードする、といったものが挙げられよう。

また、客観的には同一の環境であっても、個体により異なるアフォーダンスが知覚され、さらには生物種によっては全く異なる様相を呈する。上記の例で言えば、大地は赤ん坊に対して「歩行する」という行為ではなく、むしろ「這う」という行為をアフォードする側面が強いと言えるであろうし、魚類というヒトと全く異なる生物種に至っては、もはや「はねる」といった程度の行為しかアフォードしないであろう。このように、ある単一の状況下でさえ非常に多面的な価値が観察され得るのであり、したがってアフォーダンス自体はほぼ無限に環境下に存在し

¹ 佐々木(1994)は、系統的に異なる生物が同種の進化を遂げる「相近」という現象がアフォーダンスの実在性を示す証左としており、Reed (1996)もそれに近い議論を展開している。

ていると言うことが出来よう²。

以上、環境世界は動物にとって単なる物質的存在ではなく、直接的に意味や価値を提供(afford)するものであると考える生態心理学の枠組みについて、特にアフォーダンスという知見を中心として概観した。本稿の目的は相互理解の原理について考察を加えることであり、したがって次章以降ではヒトが受け取るアフォーダンスに焦点を絞りつつ議論を展開する。

3. 先行研究

冒頭で示した通り、具体的な先行研究として考えているのは Gibson(1979)に端を発するアフォーダンスの議論、そして Tomasello(1999)以降の社会的認知の議論である。ここでは、各々における枠組みと関連して、本稿がどのような知見を援用するのかについて概観する。

3.1. アフォーダンス(Affordance)の階層性

アフォーダンスという概念の創出について考える際、Gibson (1979)と Reed (1996)による議論は避けて通ることは出来ない。Gibson (1979)は伝統的な心理学の殻を捨て去り、事物の意味や価値が知覚者と環境の相互作用により規定されるという知見を打ち出したが、そこから敷衍する形で Reed (1996)は、アフォーダンスには種による普遍性(傾向性)が観察されるという議論を行った。ヒトを地球上に広く適応放散した多様性に富む動物であるとしながらも、道具の形状・材質や居住地等には広く共通性が観察されるとし、それらの現象をアフォードされる情報の共通性に由来するものであるとしている。ここから導かれるのは、アフォーダンスという括りにおいても、そこには種としての系統発生的(phylogenetic)な性質と個体発生的(ontogenetic)な性質が観察され

² アフォーダンスは環境下にはほぼ無限に存在していると書いたが、これはあくまで知覚者との関係を排除した上でのものであり、実際に受け取られるアフォーダンスは知覚者と環境の相互作用により探索・発見されるので、その性質上、決して無限とはならない。

得るという知見であろう。また、アフォーダンスの示す様々な様相については Tomasello(1999)も言及するところであるが、その枠組みにおいては系統発生的な観点による自然アフォーダンス(natural affordance)、そして個体発生(或いは社会学習)的な観点による意図的アフォーダンス(intentional affordance)といった峻別がなされている³。本稿が拠って立つのはあくまで言語現象であるゆえ、心理学的な色彩が強い Gibson(1979)や Reed (1996)の議論に深く立ち入ることは避ける方針を採るが、両者における階層化・類別化されたアフォーダンスについての知見は、ヒトの相互理解の仕組みを考察する際に示唆的であるものと考えられる。いずれにせよ本稿が着眼するのは、アフォードされる性質に階層性が存在するとした上で、ヒトが環境から受け取る意味としての系統発生的および個体発生的アフォーダンスが、コミュニケーションにおいてどのように機能し得るのか、という点である。

3.2. 社会的認知(Social Cognition)

概してヒトに関係する対象の認知のことを指し、対人認知・集団等の社会的対象の認知や、社会的相互作用の認知といった広範な社会的知識の認知過程を裾野に入れた概念である。この社会的認知と関連する先行研究として本稿が着眼するのは、Tomasello (1999)以降による他者の意図理解能力(intention reading)である。彼の言語習得についての議論では、他者が自分と同様に意図を持つ主体であると理解した上でその意図を把握する能力(intention reading)と、統計的情報としての多量の言語的インプットの中から規則性を抽出する能力(pattern finding)が大きな重要性を持つということが提唱されているが、本稿はこのうち特に前者が、ヒトのコミュニケーションにおける相互理解と密接に関係するものであると想

³ Tomasello (1999)は、子供が「ごっこ遊び」をするのは、ヒトが人工物から受け取る慣習的な意図的アフォーダンスを理解した上で、本来的にアフォードされていない用法が、他者にとって面白いものとして映ると考えているからである、としている。

定する。

上記の Tomasello (1999)によって提示された他者を主体として捉える能力について、先述のアフォーダンスの議論を踏まえた上で考察してみよう。極端な表現をするならば、知覚者(自己)にとっては他者もまた外的な存在物であると言える。これはすなわち、他者もまた様々な情報をアフォードする一種の環境であるということの意味する。この他者によるアフォーダンスは、「情報源たる環境が自己と同様に意図を持つ主体である」という点において、その他のアフォーダンスとは異なる性質を示すものであると言えよう⁴。先述の通り、アフォーダンスの下位構造としては多層的な性質が想定されるが、本稿は、この環境としてのヒトとその他の外在物における認識上の差異に着眼し、ヒトによりアフォードされる性質の特異性を視野に入れつつ、コミュニケーションにおける言語現象を考察する方針を採る。

4. CHILDES に基づく対話分析

本稿はアフォーダンスに想定される系統発生的(phylogenetic)および個体発生的(ontogenetic)な側面のうち、特に後者の習得が他者の発言や意図理解の上で重要であるという立場を採るものである。この点に関して考察を行う目的から、大規模な対話データベースである CHILDES(Child Language Data Exchange System, <http://childes.psy.cmu.edu>)⁵を分析の母体として採用する。CHILDES は幼児と成人による相互行為を主に CHAT というテキスト形式で電子化したものであり、その性質上、個体発生レベルでのアフォーダンスが大きく異なる参与者間で

⁴ 他者の発言や態度により知覚者の発言が誘発される等、ヒトによりアフォードされる価値は社会行為的な性質が強く、社会的アフォーダンス(social affordance)として言及されることが多い。その反面、社会的アフォーダンスの統一的な定義は存在しておらず、議論としては発展途上にあるといった感が否めないのが現状である。

⁵ カーネギーメロン大学の Brian MacWhinney とハーバード大学の Catherine Snow が中心となり構築している。解析には、CLAN という独自のソフトウェアが必要。

のコミュニケーションを考察し、その通時的発達を観察するのに有益であると考えられるからである。ここでは、具体的な対話として English Brown Corpus (Brown 2004)内の Eve(1歳6カ月-2歳3カ月)に焦点を当てる。以下、一例として母親と Eve による対話を記載する。

*MOT:	uhhuh .
*CHI:	what ?
*MOT:	I was just bent over .
*CHI:	hmm ?
*MOT:	I was just bent over (.) and I said uh ["].
*CHI:	said oh . [+ IMIT]

(Brown 2004: eve18)

上記の対話を始めとして、CHILDES における Eve の対話データ内では間投詞として使用された発話(oh, uhhuh 等)に対して、その意図を聞き出そうと質問文を発する事例が少なからず観察された。この種の現象からは、隣接応答ペア(adjacency pair)のように、先行する発話が後続する発話行動をアフォードしているという可能性が見出されよう。さらに、先行する発話それ自体は後続する発話を要求する性質を示すものではなく、したがって子供の発話は、環境下でのアフォーダンスの探索活動により抽出された情報に基づいて自発的に成立したと捉えることも可能になる。敷衍すると、ヒトの発話はそれ自体である種の伝達意図(communicative intention)の表明として解釈される傾向にあり、それを知覚した者に応答(協調)可能性、場合によってはヒトの発する特殊なアフォーダンスとして発話への圧力⁶を供しているということが示唆されることになろう。そのような人の発話による圧力を踏まえた上で、多様な状況下で如何なる行動が求められるかを個体発生的に習得することが、コミュニケーションにおける相互

⁶ Tomasello を始めとする議論においても、相互行為における力学が社会的圧力(social pressure)として言及されている。

理解において少なからぬ機能を果たすものと考え、

しかしながら、今回の解析結果のみで本来の目的であった系統発生的・個体発生的なアフォーダンスと相互理解の関係について深く踏み込むことは出来ない。対話における環境としてのヒトに着眼する場合、その特殊性を浮き彫りにする為の比較対象は不可欠であるし、本稿の対話分析量も証左とするに足らないのが現状である。したがって、手法の練磨や前提(アフォーダンスを援用すること)における過誤の有無等、妥当な議論のためには理論や方法論の深化は不可欠である。理論偏重型ではなく、現象がどう立ち現れているかをより詳細に検討することが急務であると言える。

5. 結語

本稿は、生態心理学領域におけるアフォーダンスという知見を援用しつつ、コミュニケーションにおける言語処理の構造およびその可能性について、大規模な発話データベース CHILDES を基軸に据えて議論を行った。暫定的な結語として挙げられるのは、コミュニケーションにおける推論が、外在的な環境、特に参与者としてのヒトのアフォーダンスにより規定される性質を持つということ、さらには個体発生の過程で習得されるアフォーダンスが重要性を有するであろうという知見である。

しかしながら、現時点で再考すべき点も挙げられる。分析の母体が寡少かつ成人同士のコミュニケーションとは様相が異なる可能性があること、アフォーダンスの細分化に伴い理論が破綻する危険性が存在すること、コミュニケーションという用語自体が広範な概念を内包するものであること、パラ言語的情報を捨象して言語現象のみで議論していること等、枚挙に暇が無いと言えよう。これらの克服を当面の課題としたい。

参考文献

Brown, R. 2004. *English Brown Corpus*. Pittsburgh: Talk Bank.

ISBN 1-59642-007-3.

Gibson, J.J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin.

Grice, H. P. 1975. Logic and conversation. *Syntax and semantics*, 3. New York: Academic Press.

Langacker, R. W. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics 1 (1)*, 5-38.

Reed, E.S. 1988. Why Do Things Look as They Do? The Implications of J.J. Gibson's *The Ecological Approach to Visual Perception*. *Growth Points in Cognition*, 90-114. London: Routledge.

Reed, E.S. 1996. *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. New York: Oxford University Press.

Sperber, D. and Wilson, D. 1985. On choosing the context for utterance interpretation. *Foregrounding Background*, 51-64.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson. (1995). *Relevance: Communication and Cognition* (2nd ed.) Oxford: Blackwell.

Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard Univ. Press.

Tomasello, M. 2008. *Origins of Human Communication*. Cambridge: MIT Press.

Tomasello, M. 2009. *Why We Cooperate*. Cambridge: MIT Press.

佐々木正人 1994 『アフォーダンス：新しい認知の理論』 岩波書店

本多啓 2005 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』 東京大学出版会